

重修真書太閤記

十編  
七

13  
459  
97





18 録  
門 459  
巻 97

消  
福  
兼

重修真書太閤記十編卷之十九

後藤又兵衛大麻山と責落と事

并長曾我部掃部頭勇戦の事

後藤又兵衛母里太兵衛管六之助栗山備後四人鉄  
炮足輕等と引率し大麻山の山深く押行し処一村  
の在家ありその中より長らさめの家致り  
是より大麻山の城に致る道あり案内を褒  
美の至るに任せて鳥目を取らんとつへ村の  
長若の五六人呼出して此大将さま方と大麻山  
へ御案内申上へ御褒美の大將より下されりと

同  
政  
會  
印

大岡記十編卷十九



の御沙汰なりと云ひ若めの共大に悦び谷と越峯  
と渡り峽を傳ひうらくして大麻山の水の手を致  
る爰の谷川を堰上げて城中の用水と汲入る処なり  
前々仙石り恐ひのめの爰に來り水汲と見とめ道  
筋に枝折したまとも山道の事なれいのまご本陣  
に飯り付び折しも城中より水汲とも五六十人出  
來り桶を以て水と汲処と見とめ母里太兵衛鉄  
炮足輕に下知してひりくと打とけり水汲とも  
二三十人矢庭に打倒され残るの共仰天に足腰  
立び居たるののと召捕城中の案内となり水の手  
の門より込入関とどつと揚さういふとも城中以

の對に周章以後藤は足輕共下知に爰にこへ  
火と掛て燒立しうい餘烟大手のうへ吹あひさ  
大手搦手一同に騒動大形あり仙石權兵衛に恐  
ひのめののよご帰らざる内に城中より出火ありと  
見定め能折なり搦手より乗入るやと思ふ処に城  
の後當りて関の聲聞えけるは是に不思議なり何  
のめり搦手へ廻りげん心よごさうあと思ふ処  
に追々鉄炮の音響さ火の手をげしと燃上りけり  
間より関の聲ありさうさうとさも怖ろしく谷  
も碎け嶽も崩るる如く夥しなんとつゝも愚う  
なり黒烟の絶間くと見渡をい黒田り手よごさの



日頃高名しつると沙汰する後藤又兵衛う熊の毛  
の大半月のさしめぬく見へしうの仙石  
權兵衛あされそて如何しとて又兵衛より此城の  
間道を探り出して攻入つるも年若しとて然も  
人数と持しめぬもあぬ先と越し口惜さ  
然として此の成つと非然も我忍ひの  
者ともい如何しとやらんとし處へ走り帰り  
水の手の容子い如斯くと注進し權兵衛の心付し  
水の手に至極の上策ありとも又兵衛ハ人数  
と連行し故に其功と立ち最もや黒田り手の  
母里菅栗山其外面もあつて切てまらうしうの城

中よある處の者共爰に追攻られしと切破さ  
し間尻長曾我部一所に打寄りしと亂たる打  
込の軍に大死をんも云甲斐ありしと出ぬ秀次  
の本陣へ切入あひ好い秀次の首と得へし叶ぬ  
時に討死をんと同志の侍百余人魚鱗と備えて切  
て入四角八面に突立しうの黒田り侍ともあつり  
落され大手の坂を半過て引退くと得たりと得た  
りと間尻長曾我部息も繼あえし押來ると仙石權  
兵衛さつと見て是ハ當城の本人と岩倉の掃部頭  
よ千騎と勝る大将なり今日の得物とさへさなり  
と待て迎えて追取卷間尻長曾我部詞と揃へ優し



くも我々と打留んと向ふりや然とも我等目さ  
び敵の汝とあつて罷退けとのふあつて五人張の  
引よつ引て兵と射誤と仙石の射向の肩の中仙  
石のれと事ともをび切て掛は突拂ひ坂の中  
て追上を追下し半時あまう戦ひける終り仙石  
切負ういあうて退たりけりされとも爰まで間尻  
長曾我部う勢多く討てて今僅に二十余騎は足  
さうしうは是らううまで争て本陣へ切入つと但  
爰まで打出しとちう一方打破り本國へ引返とへ  
しと二人心と同しとて打拂ひ引ける荒木  
頼母と名乗て間尻に切りとる間尻四尺計の太

かを以て荒木と戦ひける間尻荒木う鎧と入損  
し射向の板のそのとと突しととも助六左衛門  
尉とともをび鎧とくり寄荒木と一太刀志とて  
二切荒木切しとちう間尻と引組志とて捨合ける  
う荒木終り組勝助六左衛門尉と打てけり是と見  
て間尻う郎等十餘人のひしと切死したる掃部  
頭へりくととも知と獅子の子の荒たる如く狂ひ廻  
る敵とも多く打しととも郎等とて今主従  
三人と打あつとちう掃部頭少も氣と屈をび七度  
八度取ては返り返りて戦ひあまうと手痛く戦  
ひけるゆとと二人の郎等もとて打し今掃部頭



一人はなほつととも元より剛氣の勇将なれは近  
つくののせいの切の突つ慕ふののせいの射とおと  
土州とさしと落延けり叔まゝ黒田孝高の後藤又  
兵衛り謀めて大麻山を責おとし城中残らば焼拂  
ひ本陣よ入ける処へ仙石權兵衛の間尾助六左衛  
門尉り首と打取其外の首とも取持をわくく本  
陣よ入て實檢よ備ふとを秀次大に御感ありて次  
第具よ注進の上黒田仙石の御感状と下され後  
藤荒木つひ太刀馬鞍鎧皆具給たりけり抑後藤又  
兵衛り智謀よありて日数十九日の間よ岩倉大麻  
山の両城と落し去るひ今へ脇城とらうりよありけり

よよのり長曾我部新左衛門尉親吉城と棄て大西  
白地へ引て入是より秀次の軍威日々盛んよな  
まつると以て秀長の一宮責の容子と聞合を一左  
右次第カと合をんと擬をりてさうり爰よ大納言秀  
長卿へ小西彌九郎蜂須賀彦右衛門尉一柳監物等  
と從へ四万五千餘騎と引率して一宮城へ發向わ  
り抑あの一宮とのふ処へ當國第一の切処よて要  
害無双の処なるよ四國第一の智謀武勇兼備を  
谷忠兵衛江村孫左衛門と大将とひり横山隼人と  
目付ととて楯籠り山下よ柵と三重よ結寄手あそ  
しと待ける処へ五月廿六日の早天より大和大納



言秀長卿大軍よとてお寄城と去と十町をうり  
陣と取もの城の景氣と見つめりけるは高山と  
無ととも山城よと堅固の体なり水の手都合  
ふろく兵糧玉薬も之とと沙汰とれぬ勿  
勿力責と責うとめり如何いとんと評定あり  
けるは堀久太郎兎角一戦と仕掛敵の虚實と計り  
そのうち工夫あるは明日の先陣の某仕りい  
んと申けるは此議然と然を廿七日夕刻  
より城へ責詰て一合戦と今宵の人の馬の  
息と休めと陣々休息の休なりけるは谷忠兵  
衛矢倉より篤と見あり然江村と向ひ申けるは

敵長途と寄来りつと定めて少の疲とつらん  
井樓と上て城と見積其ま陣中静うと見ゆるは  
軍と明日と定め今宵の休息と覺えい今夜一夜討  
して秀長と打取いとんと示し合を其用意より  
とけるは寄手の方より蜂須賀彦右衛門諸卒  
と向ひ城責の明日の夕刻なるは味方の陣何とな  
く志のありいと急りと覺ゆるはめりる処へ夜  
討りと入たるは此處と足と留るとなるは  
とと陣々と戒め廻りけるは諸將も少の用心  
たりとと其夜九時より谷忠兵衛遣兵  
とくりて五百余人とて城と忍ひ出堀久太郎陣



へ押寄見るまゝつらきも高嶺うのて寝入るる谷忠  
兵衛うゝあるへと兼て思ひこころとてまのつ小  
屋小屋へ火と懸て鯨波とつと作り火花をちら  
しと切入たまの堀り陣中狼狽一本陣まても亂れ  
並んとしける処へ蜂須賀彦右衛門横合より切め  
りうけるまゝり谷以の外に敗走し城内さしと引  
けると一柳監物蜂須賀と續つて攻立しうの谷も  
あつと危ふりうけると江村孫左衛門荒手と以て  
切りりけるまゝど蜂須賀一柳も相引り引たりし  
うの谷も江村も無難に城中へ入るる廿七日の  
早天に忠兵衛孫左衛門に向ひ昨夜の始末残念也

貴殿の救ひなきはあつと危ふりし處なりとい  
つゝ孫左衛門のやれあつと秀長我等氣と見ん  
とて却て秀長の氣と我等と見をこり然に昨夜  
の夜討に十分の勝なりと賞美をさしうの忠兵衛も  
氣と取なきと一專一に寄手を挫く工夫と廻らしけ  
り

大納言秀長卿一の宮城責の事

并長曾我部信親後援の事

秀長卿の一宮城中谷江村り氣と引見くやとこれの  
うれげに却て谷り夜討に堀久太郎の陣と焼と  
しと残念よりのことつれとも蜂須賀彦右衛門尉



う用心嚴重なりけるより総敗軍に及らば左も  
 なりふ當地に足と溜ることもあるものなりけるの  
 のと彦右衛門尉を厚く尊崇ありて太刀一腰と  
 賜ふ夫より又廿町余り引退と柵と結仕寄と付  
 一勢く攻近付へ謀とけり處へ中納言秀次  
 参向ありしり秀長大に悦ひる一方の責口と  
 預げらるる總軍に五万余騎あり城中より谷忠兵衛  
 江村孫左衛門手と盡して防さげると寄手の大勢  
 あり入替く攻立る蜂須賀申けるに加様と日と  
 行く軍とるうち本國より援兵押來り味方の  
 跡と取切たふの實に難義あるべしりるも當城

と神速に攻落とへしと勧めしと藤堂與右衛門實  
 尤と同心し真先に進て攻立けるより城中も大  
 騒立火水より防さげり横山隼人と名  
 乗藤堂と目よりけ大身の鎗と以て塀の上より立顯  
 せし暫時突合ける藤堂もさし勇士あり少由ひ  
 るより突合て勝負更に見えさるる藤堂も胸板  
 目掛けて突出を藤堂受損し既に危ふく見えし處  
 と藤堂仁右衛門澤田九郎兵衛より寄隼人より向へ  
 隼人そのと猛虎の如く走廻り飛龍の如く掛破り  
 けしものも持あまし見えし處と谷忠兵衛  
 江村孫右衛門隼人討をふ續けぬの共と下知し



五百余人切て出堀久太郎備と打破りけるもど  
 隼人大力と得藤堂勢と薙立く戦ふる黒田  
 勢ハ搦手へ廻り後藤又兵衛母里太兵衛菅六之助  
 栗山備後真先と進み搦手のめと攻立るゆと搦  
 手の門を打破り込入られハ又一重内堀と入り  
 て逆茂木さひひく引たれハ是より内へハ入もを  
 中門の櫓より堀の上と楯突並つて鉄炮と打  
 出ける口十二三間の堀と隔て一処なれハ越玉  
 らぬ玉もなぐ又高きより下と処へ打たれハ越玉  
 もなり寄手多く爰まで討てたり又兵衛下知  
 火箭と頻り射とけしハ城中の役所く燃付

しうとも谷忠兵衛う秘て火箭の手當も嚴重に  
 置しうハ忽ち打消て焼も募らとび一柳市助ハ  
 後藤も續つて外曲輪と乗破りて見せハ搦  
 手の如く口十三四間の空堀あり是より内ハ岸高  
 くして昇るつと楯もなり如何いせんと見上る処  
 と嚴重矢玉と防りれ引んととてハ後陣の勢とも  
 續きたり攻上るつと便もなぐつとつと的立  
 てぞ打せたり谷江村横山ハあれと見て藤堂堀と  
 打こそ標引り引入けると付入んとあり共城  
 中より能防さけるより寄手もさのも追搦と天  
 晴剛のめめやとあれと褒つ一息繼て居たり



ける谷江村横山の城中に入て手負と療治し討死  
と調見する龍の多く討ともて手負も薄手  
二三十人過さうけり然とも外曲輪と搦手の外  
門を破らして入りし口惜し是を取りへさん  
と谷も江村も横山と共に此事との談ひけるり  
何れも大西へ注進して元親の料簡を聞へると  
評決しそれより山道傳ひに飛脚を馳たりけり叔  
も大西白地の城より諸方の軍の注進を聞へ緩  
急取々しと何処へする加勢とさし向んと評定  
ありける処より阿州の撫養木津岩倉大麻山のつと  
も落城しつるより一宮城より合戦の最中とさく

谷忠兵衛江村孫左衛門横山隼人忠節の致りと云へ併是も寄  
手八万余騎まこと十死一生の場合あり如何と云と云と彌三郎  
信親只今讚岐より引返しける間とこの儘立上り左様と急  
なる戦ひと何と今まで加勢もさるるや一騎あり共信  
親うけ向ひ谷江村横山より力と合をいへるととて鎧の上帯強く  
ゆ馬より打乗馳出といへも仰られぬものや誰う後と申へ  
さここ熊谷四郎左衛門つと駈ぬけて先立是で見ぬもの我  
劣らりと馬を進めけるものと讚岐返りの三千餘騎一騎も  
とど打出たり實侍は召仕人の心よるもの何れも涙で  
流しと感しけり信親一宮へや一里より押し詰り高き山上  
旗ありて先會圖の狼烟と上たりし一宮城中より谷江



大陽言一紛一十九  
村横山つともあれと見こころや大西より援兵の来り  
そやと上下こめさ渡りて是と喜ふ信親能谷と呼て先  
信親豫州に發向して加藤西川と合戦し武勇の名を揚し續  
讃州に出張し黒田と戦ひて挑しつとも後と取次今す  
阿刺へ来り當城の後援たり但加藤吉川の勇将なり小早川  
と黒田の智将なりと信親弱冠なりとあれと周旋しあれと敗  
るこ全く以て士卒の能働さし故に更し信親功あり  
されとも度々の勝軍し士卒めし驕る心有て敵を侮らば是  
敗の基なり秀長は加藤西川黒田の類にあらずとも黒田は  
こゝ来りて秀長と援くるこゝへ敵は正しく黒田は黒  
田の手よて心よくさへ後藤又兵衛一人は能きよや人々

努力する侍衆と下知しぬへ熊谷しこころ誰の敵と侮り  
可申と兎の緒とめ弓の弦しひめし外曲輪を押し詰  
上方勢の後へ廻り短兵急し切崩さんと進みけり上方勢  
の存候馳返り黒田よりこゝと注進しけし孝高秀長秀  
次両卿に向ひ彌三郎信親後援しと罷向ひひし信  
親し弓矢の振と見ゆる中國より龍の多く見及ひ  
不申良将なり士卒を遣ふと實し手足を遣ふ如  
し今すも當城に向ひひし必生てうしとた  
のひ定めてひしめ勢のちとも三千餘のひし  
是は何も信親肺肝しうし口をいてしめのよひし  
當手より五万より十萬より向ひひしし龍様ある



死武者より合て味方若干とて其詮のくひ  
四國の内大臣家の思召まゝ追付平均仕るべし  
四國平均のゆゑその信親も内大臣家の御家人  
たゞ一宮の外曲輪より押詰り勢を一里より引  
退て陣を取

重修真書太閤記十編卷之十九終

重修真書太閤記十編卷之廿

小西彌九郎拔懸の事  
并上方勢敗軍の事

黒田孝高秀長秀次兩卿と諫めて一宮の城の外曲  
輪より押詰りたる軍勢と引返り一里あり引退  
て陣を取信親の死氣と避し一宮の城の外曲  
成り天王寺より宇都宮と避たり一宮の軍法を  
然るを先日小西彌九郎目付役として出陣し  
から無謀の軍を為し如何と黒田は難をられ  
と深く憤りその度孝高信親と恐として一宮の軍勢



と引取と臆病の至なり讃岐よて某信親と軍して  
敗軍志のするい某とやまうて抜くけとしり故なり  
備とよめて掛りなりのつて信親に負ふことある  
つとや然るる信親當國よ來りいさく旗の手も見  
以別か一戦も及ぶるる押詰し軍勢を引上る  
のこりるべ一里餘りも引退と實は上方勢の瑕瑾  
と云へし某軍中の目付たり勝つと軍負まると軍  
と見知りとの眼はく勤るへさや黒田孝高との  
と一人軍中の權と專よとんとて内大臣殿の御目  
曲尺よて仰付らして某とさるる無念とも遺  
恨とも云へさ様なり某手勢を以て信親に駈向ひ

無二の合戦し信親と生捕り尤も無信親と打取  
可申と某の方寸よわうと詞と放ちて両卿に請申  
まうの両卿とも其方のいふ処尤なれとも孝高の  
内大臣殿の御意を以て當陣中の進退を任されと  
り其方へ目付なり孝高の指揮を受る人受ぬ人と  
見知て言上とると以て役とを然るる其方よの孝  
高の指揮と敗ると目付の役と反げりとして更許  
容はし小西も云へさ詞はく其座を立て我陣屋よ  
入家來共よ語りけるい某目付とて出張しつる  
の諸將の働との善悪と見極め戦場の容子と注進  
をんら為しとて自身よ手と下し軍とて職よあ



らぬと云ふてもなり然るに讃岐にて信親の為  
に敗軍して黒田に援られ口惜き其方共も知処  
あり夫よりして孝高我等と輕侮しゆともこれ  
目付の軍と與る役目とあれば内大臣家の御目の  
代りなり何某の何時も出陣したり何処にて誰と  
軍して勝たり負たりと云ふと注進するに勤方か  
る更なる合戦と與る役ありと云て我等は戰場の  
働をそとくればといふと是は我等は武勇と嫌て  
孝高は邪魔とる業と知るところ其方共は何とあり  
ふと問はれ何れも憎む黒田に裁判する君のつり  
めらるれば臣死びつてや御供と出陣し信親と討

取黒田め鼻ありを可申叶はぬ時へ死ぬるまで  
と養ふる主の思たといふ傑の狗死と吠る例も  
斯やと知たり小西悦ひ然へ用意をよとて兵糧  
遣ひ馬も飼ひ鞍置をその勢都合二千余騎にて  
出陣をり此義軍中目付ありそれへ申立しる  
忽ち兩脚の耳に入兩脚大に驚きあひまのめや小西  
に抜掛しつると言語道断のある舞や如何なる珍  
事とや引出さん讚州にて抜掛し信親と追掛られ  
るは危ふりしと黒田の援ありて命と全く  
せし非をや夫は懲もをば今日の始末必定一大  
事と引出せしん如何とへと評定ありけしん



黒田孝高申様軍の進退の人と地と時とふあると  
誰のく知たるとなり時とつへハ五月なり然も夏  
至ふくくは夏至ふハ北と乙寄とし坤と丙寄と  
東と丁寄と一宮あり大西ハ北と當る北ハ乙  
寄ありおれ元親天時と得たりと申へ次ハ我等  
ハ客なり信親主なり案内者ありおれ地理と得  
し申へ次ハ信親ハ本より四國の主あり民の  
懐くこと年久しおれ人和と得たる所なり小西彌九  
郎其身少なり武藝あふ茂以て人を知の鑑なり  
く又軍の道を知以定めて大敗を取らん夫ハ付  
て味方總崩れ成さる様よをへ味方の陣々嚴

重又備えきたらハ小西敗る共命を棄る迄ハ及  
ふすしと申けると蜂須賀彦右衛門聞て如何よ由  
黒田の云るく如く味方の備肝要也と夫々ハ觸  
渡し嚴敷備を立たり息借由小西彌九郎ハ敵陣  
押寄鯨波を揚下責掛ルハ長曾我部彌三郎信親鳴  
を静めて音もせび近々と引付時分ハ能そと云程  
あそおは聞とつと作りて先陣熊谷四郎左衛門  
尉真先ハ進み重ハ十三貫目と聞え鉄の棒の一  
丈さうりなると軽々と打ふり叩き立ると小西  
り手より木戸作十郎我打取て高名ふをんと進  
近つくとめめくやくと云る早く例の鉄の棒と



と取直し木戸り乗たる馬の三途をまゝうら打  
うされて馬の屏風を倒る如く倒るれ木戸も  
馬よりうらと落熊谷鉄の棒とあり上真向只一打  
と打りくる処岡田伴左衛門尉熊谷棒あり上  
脇と目ふ懸鎗と以て突くると熊谷心得引る  
一岡田う鬼の体と微塵よれと打をえうとあり  
うら以てたまるへさ岡田伴左衛門其儘息絶と  
木戸入りうらと命と助うらつとと手勢散々亂  
とてまるとまうら二陣の小西あれと見こらうら  
めの共軍入りくあそとれ我ふ続けと真先進む  
とて長曾我部彌三郎信親あとい小西と見こら

引包んで打取やと大音の匂りつれも真先より  
け出たり信親う太刀の四尺八寸重あつと又も廣  
群りうらめり小西う手の者うらうらと六七人  
難倒さうらと見向もやうら小西と討んと進む  
小西うらめりの詞と似も付ば信親う勢と辟易し  
鞭と打て逃たりけと信親馬をうらうらとそれへ逃  
うら小西彌九郎とや返をうらと呼らうら追懸けり  
小西う手散々切あひけられ二千餘人のみの僅  
二百余騎とうらうらと彌九郎とて討うら  
見えし処へ仙石權兵衛一柳監物今の能潮合と横  
うら切うらうら漸小西と救ひ出したり信親うら



軍勢とてめ熊谷谷江村と共のめと揉て攻立  
けし小西實と立足もな敗軍しげと共上方の  
陣々整々とて隊伍とて立定めたる勢と見  
て信親あまの秀吉の名代とて渡海を秀長秀  
次の陣と見たり其尤の堀久太郎とつゝ男の  
あれり切崩をと下知しげの熊谷四郎左衛門  
一陣よとて例の十三貫目の棒と以て叩き立  
ひけるるゝと仙石一柳も終に切崩され敗走  
と勝とのつゝる四國勢堤の水の切ら如く滔々  
とつと押うると見て堀侍佐崎武右衛門その  
長六尺二寸力の七十人敵とるとや信親よりけ

向ふ信親是と後目と見て下即めとされと吐りか  
うの四尺八寸た一薙と打りてとひらり  
と泳ぐと無手と組信親莞尔と打笑ひ振りとて  
両手と秘し目より高くさ上て深田の中へ投込  
たり佐崎武右衛門動もやうび死生は知びひらり  
けし此有様と見るの身と縮め舌とあるうとよ  
も人間とて有と恐怖とけり信親佐崎り馬  
とさつと見て我馬大と勞とてりあれ能馬あり  
我分捕ととと直と打乗群の堀り手へ走入た  
る堀り陣大と破とたとい秀長の陣もても崩とた  
ちたり熊谷四郎左衛門のいおのろさ上方勢の



軍ありや我等の軍は進むと聞くと面々の進つた  
めは出陣をせよと進足のとやと叫ぶと追掛  
たこの信親も追つていつと追逃るそと馬を  
進むれの秀長卿も手廻り廿騎をうりて進め  
目もやと信親を見付秀吉の代官たる秀長と見  
しひり目も返して追うけたれの秀長も  
今のは是追とおやされしや馬の首を引返して  
とて峯竹五郎と云もの押止め爰の大將の討死  
しとて処なりとびと押戻し峯一人信親に向つ共  
し十七騎を引返して信親の手に向ひて討死を此間  
し秀長ゆりて落延る秀次の旗本も谷江村に切

立ちと散々となりける処へ最初より隊伍をこ  
びとえたりける黒田峰頂賀藤堂の三人三方あり  
信親に向ひ関を作り鉄炮を打掛けるよと信親も  
人数をよとめて引返して熊谷四郎左衛門尉後陣  
幾度と返り合ひたりけるを見て黒田も  
手繁く是と追ひ此戦は味方二千餘人討ち手負ひ  
三千百余人と注したり秀長秀次両卿小西と召さ  
其方々の内大臣殿より軍中の目付と仰付られ  
しと背に自身を軍を一条以の外に所存あり  
申とてしと有りしを小西實は恐入家來とももの技  
掛しとひひと制止ん為懸出てい處は如斯の



仕合と申げると秀長秀次兩卿偽りりと嚴敷勘發  
ありしとも味方多く戦死して計らざる損失の  
上今又小西を誅せんと然るへうらびと孝高  
の蜂須賀藤堂ふと取々よつとめげりよぞ小  
西罪科のゆるされたり

上方勢四國勢と合戦の事  
并長井半十郎勇戦の事

黒田官兵衛孝高今年四十歳秀吉公より十歳秀長  
卿より六歳の弟より蜂須賀彦右衛門尉家政の廿八  
歳藤堂與右衛門尉高虎の三十歳秀長卿の家臣か  
り小西彌九郎ハ廿七歳秀次卿ハ十八歳加藤清正

ハ廿五歳小早川隆景ハ五十一歳後藤又兵衛ハ十  
八歳の時なり母里太兵衛栗山備後管六之助のつ  
とも今度の軍は格別骨を折つてハ秀長秀次兩卿  
軍とよとめて備と立ち此人人々なりを死  
危ふりつと次第なり如斯て秀長卿諸將と集め  
て仰出されげり何れも孝高のつとむし如く四  
國方天時地理人和とも得たりとおるえさる然  
らに當分合戦の上りて大功と立ちての多し且  
忍びと入て風俗と聞き百姓の上り兵衆あり兵衆  
の上り山士あり山士の上り地頭ありとりや百姓  
の耕作と勤めて軍の夫と傳馬と出び兵衆ハ山



士は従ふて出陣し山士の一山一峯を領し其の  
 下の兵衆と百姓と慈愛と中國の類にあはれと云  
 備へ是を幾度とあり戦ふて何も我軍策を敵の  
 知しと全く其の兵衆山士の所為と知しと然  
 らしめて信親の事も急な戦と決をんとしりやと  
 おのれれり是より陣々を堅く用心を夜討  
 の難なるは又敵の陣々を挑むともう  
 めるは出合ふとあり敵の氣つりれ退屈を生  
 び我陣を張つる間の耕作も十ふなるへり  
 自然兵糧乏しくなる道理なるへり然しそのち  
 一時攻め攻むし申へくはといふれりハ諸大将

たちつとも此議は同一面々請取し持場を固  
 めて天時の移ると待とけり四國方よてハ彌三郎  
 信親の武勇より上方勢以外の外は敗走し一の宮  
 の城に籠る処の谷忠兵衛江村孫左衛門尉開運と  
 申迫りいなりびとも一旦の勝利は氣力を増兵勢  
 ところある盛なり然るは上方勢は陣々を固めて晝  
 夜の用心怠りなく四國方より戦を挑むもあれ  
 ば抱り合めりなく嚴重に陣を張て更は油断の体  
 ると結句つみそく思ひ居たりけるは上方勢何  
 なる謀とやなりつらん總軍一度は城を攻たし一  
 時は攻破らんと計る由と注進したりしハ谷も



江村もこの日頃徒然たりけるよとわ能事おと  
 やと城中さんさめさそ打立けり寄手の方より先  
 鋒次鋒の列と正し軍奉行軍目付のつとも持場く  
 と堅くしてまの矢合の鳴鏑より攻鼓の音も續く  
 一番の鉄炮の畑の下より一番の兵士鎗と入るとい  
 二番も弓衆おれを助く二番の鎗衆もせりとい  
 長柄の足輕おとらと走り此間より一番衆の  
 傍より引て息と繼又兵糧と養つり城中も亦  
 切あつと弓鉄炮と射出し打出しその間も大木大  
 石と投りけ是と防くとい寄手も急に進む  
 たり蜂須賀の手より小櫻の鎧の裾三段と紫下濃

よおととと草摺長し著り桃形の兜の緒とめ  
 月毛の馬の丈高さよ打のり十文字の鎗とうちふ  
 りうちありその長七尺よ近き大男陣頭よ進んで  
 鎧ふも張大音あけ是は蜂須賀彦右衛門尉侍よ  
 長井半之丞とつふりの嫡子半十郎なり生年十  
 九歳十六歳の初陣より大小の軍よあふと既よ十  
 餘度いよ一度も手と空くといなり城中の人  
 人誰よとも是へ御渡りありて上方武士の太刀の  
 鍛ひよりしと鎗遺ふ様とも試みへと呼られん  
 櫓の上塀の蔭より雨霰の如く鉄炮と打出しつと  
 とも越玉よと身よ當らひ蜂須賀の侍ともあれ



と見て長井討とふ續ゆくと聲うけなり山田青  
 山川口はんとつふ若侍鎗の穂先とそろへて進こ  
 たり城中より吉良轟左衛門といふの青地の錦  
 とたぐいて緘したる大荒目の鎧と烏帽子形の兜  
 の緒と一め三尺八寸の太刀抜持て長井と切てり  
 める長井の鎗と取のへて七十餘合を戦ひけり  
 勝負付ぬの組合て暫時捻合つと共長井は若吉  
 良の老たり終り長井組勝押えて首とりさてけり  
 四國勢長井と討んと取巻と長井更事とをば切  
 まつ切まくりなりける程に鎗も刀も打折たり  
 長井とん方なれいりとの松と引抜根付の儘ふ

打あり戦ふ江村孫左衛門あれと見くわて  
 ら勇士なれ共鉄炮とて打落とと下知しけり承  
 いと足輕とも雨の如く打とめりとも長井  
 う身の中らさうげと谷忠兵衛此の一人も多  
 く軍兵と討とこの口惜と射落し吳人と弓と箭  
 番ひ切て放とる過たを長井う弓手の臂とまて  
 めと射たり長井その箭とうあくり棄流る血と  
 おし拭ひ谷う備と切て入黒田勢あれと見て長井  
 と援けよと續きたれい蜂須賀う勢もおあし  
 立げるとあり谷江村散々切立られとて危ふ  
 く見えし処へ長曾我部彌三郎信親のろもうら



ぬ三千餘騎真しくらの切や、は不とよ上方勢總掛  
よ政結たり秀長卿あせを見て信親よ多くの士卒  
を失ひ、無念やるや、あ、堀仙石ハハハ、くよあ  
るそあ、成りめよと呼、切をらひ打ら  
ひ馬をま、め、駈立たり信親の手より熊谷四郎  
左衛門ハの鉄棒を打り、たくき立る不とよ  
上方勢四度路ありて敗走、秀長卿もからく、  
て逃、ふを四郎左衛門目、やく追、めまてよ、か  
うよと見え、は、仙石助兵衛、か、け、る、り、て  
熊谷よ切て、か、は、熊谷、み、く、雑兵、め、とい、人、聲  
の、ま、ま、たく、き、伏、た、れ、ハ、助兵衛、その、ま、く、息、た、え

たりあせを見て仙石伊兵衛同、く切、り、は  
を信親、せ、より、て熊谷、を、た、ま、け、ハ、秀長、卿、も  
本陣、よ、入、て、息、繼、た、ま、ふ

重修真書太閤記十編卷之廿終



重修真書大問記十編卷之廿一

加藤清正智謀の事

并四國勢敗軍の事

伊豫國に發向と一加藤虎之助清正吉川元長小早  
 川隆景の三大將松山城外に出張し長曾我部彌三  
 郎信親金子傳兵衛兩人と對陣しとありける処に  
 信親讚州の合戦急しと味方難義に及ふよしと  
 聞伊豫國の金子傳兵衛一人と残り置その身の  
 讚州へ馳向ふ金子傳兵衛信親留守の間へ只その  
 備と固くしと敵の計策にあらばる故以て本意

大問記十編卷十一



と一晝夜の用心油断なく夜廻りの編木拍子木篝  
火の敷と増つと嚴重に構えたり加藤虎之助小早  
川隆景此体と伺ひ知相談しける上諸將は向ひ四  
國勢讚州へ向ひしと聞つて定めて金子傳兵衛  
その陣を破らざるを以て猛々として振る  
動くとあるまゝして此間西伊豫へ出張し大  
洲守和嶋の邊と切取つておのふ如何あらん各  
異見聞ありと云へ何とも然るべくいふんと申  
よりの小早川隆景の勢二万余騎を引分西伊豫さ  
して發向ひるとも吉川加藤の両大将は金子小  
向ふてつゝ堅固に對陣したりける抑四國の道

法と考ふる元親の本陣阿州三好郡大西の白地  
より伊豫の國守摩郡河江へ四里半河江より八日  
市へ三里八日市より新居郡西条へ六里西条より  
周敷郡小松へ二里小松より越智郡今治へ五里今  
治より温泉郡松山へ十八里松山より喜多郡大洲  
へ六里大洲より守和郡守和嶋へ十一里守和嶋よ  
り緑村へ十三里緑村より松尾坂と越て土佐國幡  
多郡より川に至るをへて六十八里半より幡多郡  
より川より宿毛へ至り宿毛より中村へ六里中村  
より川より宿毛へ十二里中村より窪川へ十五里窪  
川より焼山より高知より高知より高知より岸本



と經て和敷に至る五里和敷より田の浦へ七里田の浦より名和利へ一里名和利より野根へ四里半野根より甲の浦へ一里凡白の浦より甲の浦より九十六里とつり伊豫より土佐へ越るはとつて山路より十三四里より十六七里廿里及ふ所あり又大西白地より阿波國三好郡池田へ二里池田より美馬郡重清へ三里重清より阿波郡脇町へ四里脇町より板東郡勝瑞へ十一里勝瑞より津田へ四里津田より小松嶋へ三里小松嶋より中洲へ三里より阿州の撫養より海部の本越より二十里とつりや四國の檢地つりの程より明細は知るべし

爰より攻入りて一處へ駈ぬけよ彼処より駈たると爰へ打越へ一とつり移て定めよ一軍の手筈少も違ふは實は神に通しよ一軍の大將軍かといふぬののを無りけし清正は小早川より出立し跡よて金子陣中の容子とつり探るは傳兵衛堅固に守ると以て勝とつて更軍と挑ぶと聞出する清正一人笑壺は入りの狂くると追笑ひまげのち吉川元長と呼迎へ小早川殿へ今ころくや大洲守和島は向ひよなるへしとれは付て金子軍中と探りては實信親讚州へ立越してはる因て傳兵衛軍務と一人して取行ふより堅



く守ると主とて軍と好まはとわは是と謀  
 て誘引出し傳兵衛と討つて術を案し出しとい御  
 同心あるへさやとら問へ吉川元よりとやう  
 逸すし本性なり我心も一術しと見らやとおの  
 ひし所なり清正も御同心もやつて何うの味  
 んつさ然るへくいんらん元長先陣仕るへ  
 と申されけるを清正まつ待をへや清正り工夫  
 しとい謀あり御聞あはとて加藤清兵衛と呼出  
 其方一手五十路井徳居り旗とさしとらうとよ  
 と云含め吉川とのと暫時同志軍をよ又此方よ  
 火の手と上よはと細々と約束しけし元長もそ

とに究竟の妙計なりといらる捕まへ孔明なり  
 ともあの術よのぬめの有るさう然も工  
 夫したりと謀りしとあれも笑壺入しけり兎角  
 ころらち其夜も既よあけ渡り五更の鐘の響くこ  
 ろ吉川陣中何となく騒動しと松明おひたりし  
 く燃たて其方より攻入しと此方へ逃しと追つ  
 めへつ関の聲天地に響きとさましく夜も  
 や明ちりなるあり松山の城中も焼亡あり黒烟  
 立ち上りておそろしと見えたりける金子陣中  
 こそも起出て是と見るよ如法深夜のことなれは  
 のあいろい定うありと聲々と呼らると聞へ

大明記一編卷十一



五十路井兄弟徳居刑部心うさうさ城へ火と  
搦しそや然とも小勢なり取めく打やうくととを  
のしつとけり金子是と聞付うねて兄弟ののの  
り申としとも有今まの正しく城中へ火と搦り  
然の上方へ降りしも計畧と實は上方衆と一味  
としふあさりし可愛とと志さけりと思ひ直  
し金子傳兵衛切所と備えて見物し居たりける  
夜の明ると従ひ遠目と見ると五十路井兄弟徳居  
う旗の紋あらうと見えたりけり金子是とみ  
斯る上へ何追人と疑ふと忠義のののと援ひ取  
やと下知しつと八千餘騎と七手と分面もあつた

切て出五十路井得居う手と一川とありて吉川勢  
と切りつる吉川はうねて約束をしことなり加藤  
計策機とあつたりさし用心を金子傳兵衛と  
たのしむ引出しつるこのあつたりさし吉川勢  
のしと搦りし見ると散々と切崩され四方へつと  
逃たりけり金子まをく勝とのり隊伍ととて五  
十路井得居う勢と一手とありて吉川を追打し打  
あつたり金子傳兵衛五十路井兄弟得居刑部のつと  
ふあるとと目と配り立上りし見るとと兄弟の  
旗馬印へこれなり其どとつと人もの傳兵  
衛急度心付この不思議なり某切て出つとこの



兄弟も馬うけ寄何とりのそんめひるる得居も  
更ニ音信か怪や加藤う計るやと少し猶豫して  
居たる向ふ軍あり何のなるぞと能見とい吉  
良播磨守金子と續いて打出けるら松山の城へ込  
入んと働くと城方の飯田角兵衛あり吉良と防さ  
止めんと掛合を切崩し切返され火水となりて戦  
ふ体よと花々々余所よ見るさへいさましく金  
子も今いたまうらうの逃る吉川と打とて飯田と向  
て馳うら何の程と引替たりけん只今よとさした  
る旗も馬印も見えむあを前も後も一様と薄紅と

蛇目の紋の袖目覺くもまごあをろけ  
是へ誰りと見廻らる内は夜へののと明ら  
る雲とよたたく見とい加藤清正う侍大将  
加藤清兵衛とてせよ聞えたるのなれハ傳兵衛  
牙とくして口惜う是まて欺うとい愚さよ吉良  
のろともよ引返さんところらちよ加藤清兵衛吉  
良播磨守鎗と合を一交もせび戦ふと四國と名  
と得し播磨守と上方よて鬼神またとへ青兵衛  
あり鋒より出る火花ハ星の如く入乱とる穂先  
のひうりの電ありも猶らや勝負つら極ハ清兵  
衛播磨守お並つて無手と組双方大力なり心を



やく馬と馬と馳違ひ終る共下合て上も下も  
のち合ける何と云ふけん播磨守向ふ齒二枚  
ののち當りて打折たり此響ふ播磨守の心  
の移り透を付入て押倒しあさつて繩をうけつ  
との散あくも吉良播磨守生捕とあそ成りけし金  
子うくと見るも吉良と取返さんと左右も下  
知し驚直進するも吉良と清兵衛只一人を討  
見つてく見えける清兵衛の世もゆるされ早  
業はう落さる太刀と取り見せの五七人生死の  
しび切倒さる此間も飯田角兵衛馳來り清兵衛  
と共に切りくし金子の勢とも立足しとろ散

乱れ傳兵衛も今ハ是まてと思ひ切東西南北も切  
廻り面も振り戦ふまへ林と出し猛虎の如く久  
武内藏助も共に出たつひる是ハ加藤の計策  
と早くも心付山際の小高き処に旗おいたて敗軍  
と集め居たりける金子の必死の戦と遠く見付  
てあひ早まりぞ金子傳兵衛爰ハ死をへと処  
非をめて援ふへと聲うけて三千余人と真丸も  
備え飯田加藤も勝りあつてその中へ無二無三  
小切て入る飯田加藤も是まてとおのひて吉良  
と引立勝開あけて引退くその間も久武金子も人  
数と引上一息繼加藤吉川の手へ討取首八百余級



生捕へ吉良播磨守と始として八十余人いり味方  
 へ討死兩勢は八十四人手負二百余人一々書立と  
 以て壞の津へ注進内大臣秀吉公加藤清兵衛と  
 今日の手柄の第一として感状と賜りけり金子  
 傳兵衛へ久武は向ひ信親君へ天然備らる良將よ  
 ましよ坂ののりふ我五十と越て其戒と忘とりく  
 の如き敗軍よ及ひ吉良と虜られ何の面目ありて  
 人よ面と合さるへとやめて今一度敵ふけ向ひ  
 十死一生の軍と播州と援ひ取へくおめふあり  
 我討と一跡の事の能よ計らひあへかと思ひ切て  
 見えけし久武も尤と同心し又吉川よ馳向ふ吉

川の先陣松原彌八郎加藤の先陣飯田角兵衛真先  
 よ進て金子と討んと込入たり金子よのくとあ  
 らひ少引色よ見せしうの松原飯田をい切勝た  
 ると續けくと呼らり連まらりけり喚と立る  
 と金子傳兵衛も時分り爰と責らり下知をれ  
 へ思切たる四國勢朝の涌如く攻付く切らる吉  
 川加藤の兩勢へ勝軍よ心驕り敗北の四國武士已  
 と生捕て勲功の賞と申さるやと進む擬勢へ猛け  
 れと久武金子り死武者よ切まらり松原も飯田  
 の持あまし既よ引色よ見えける処へ加藤り手よ  
 う木村又藏井上大九郎齋藤立本以下究竟の若ゆ



の穂先と揃えて突うゝと、吉川勢の中より栗屋元近、桂元五右衛門と、中国名を得たるの共鋒を並つて切立たり。四國方の先鋒、爰を專と切結ひ、一足も引くと火水となりて戦ふ有様實ふ。帝釋、修羅の軍と云々、見り如く怖れ、かんとへ愚る。金子久武元より此身の無ののと思ひ切し。上ふれ、少くもためらふ。死切て、死死へ乗越攻たつる。血の流して混々と、杵を漂ふ。と、牧野のむら、屍の積て累々と壓より。これ、忍坂の大室も、これより勝つ。吉川、加藤と金子久武、四國と上方の軍、今日と限り、と見え、これの

夥し、おとりのひ、足はり、酢と飲て見り。と、大風起て、砂と飛、大雨車軸を流し、ける。ふあり、加藤吉川も、金子久武も、左右へさつと引別、大雨を避て、手負と撫り、ちと、ける。ちと、風も、烈しく、大木と轉り、山と崩れ、海を襲を、雨の、強く、面と向つ、と様も、然、自と軍と止、今、四國、悉く海へ入、と氣も、魂も、身へ添ぬ、と、怖、け、ま、陣屋の、ちと、臥、り、居、たり、け、を、五、七、日、過て、快晴、い、の、加藤、吉川、兩勢、先陣、後陣、の、次第、と、正、四國、勢、も、馳、向、ふ、四國、方、も、と、金子、傳、兵、衛、只、一手、渺々、たる、廣野、の中、旗、一流、お、た、た、と、その



勢四五百の過しと見えたりけり加藤清正の  
 と見て金子傳兵衛よく思切しと見えたりとゆは是  
 を討んとせよ味方も多く討つべしと後申せし  
 如く遅速のあるへびもとも四國へともあり内大  
 臣殿の御手ふ入れ処のいとも人々知あふへ  
 其故つらよと云ふ此天う下何どの処り王土よ  
 あらさらん此四の海の内つらよ王臣よ非たべ  
 内大臣との勅定を奉行し我々の宣旨の御  
 使より草木心ふけとも王命よとむらび飛鳥の  
 畜類とつとも勅宣よ従ふのうよといふんや長曾  
 我部元親邊鄙の愚人なりとも人間あり年月とく

さゆて教訓したるんよの争てか王威よ靡りさら  
 ん争てり宣旨よ従とさらん元親たよ内大臣殿の  
 仰をうしこし申さんよの金子傳兵衛久武内藏助  
 とさゆめ只今あり軍とるめの共とつて内大臣殿  
 の御家人たるへしあるこのゆと大軍の者なり今  
 のゆと詮ふさ力競して大切なる天う下の御固め  
 と失らんともさよ益ありされハ傳兵衛り死ゆの  
 狂ひよ狂ふよつれと我身と誤つともおろろなり能  
 能心得て進退しむの諸侍ともと事細かり下  
 知とれい何も心得ゆと面々の持場と請取備と  
 固めて隊伍と立たり傳兵衛り心よの我うく小勢



まで爰に備へたるんよへ心短と上方勢有無とい  
 へば切てうらるへ其時四國勢うらると引請て  
 手輕に引上たるへ上方勢元より勝に勝たる軍お  
 へ隊伍と乱し我先よと切りらるへ其時切処よ  
 待りけく大返しよりへ合と又伏勢とふを置て  
 手痛と合戦をひらたるへ吉川加藤も必定進んて  
 馳來るへ其時鉄炮の手並と選ひひらと打んと  
 計りし吉川も日頃の氣色ふ引らる金子り勢  
 と後目よりけ我陣の備とくく手配りて更ふ  
 うげんととさういひつらよ不思議の事よとて  
 傳兵衛ふらへひ思案と回し加藤よ向て鉄炮と打

うげりめ加藤陣々ささる立とる加藤先鋒切らる  
 あらん掛らぬ免をよ角せよと手配り定め待けるよ加藤  
 先鋒の進もをい却て六七町揉下て益々嚴重に備と立陣の  
 前より楯竹束と三重三重に築立其間く逆茂木引て用心  
 らと見えよけり金子傳兵衛あささる是へ味方よ返り  
 忠のののありて我計策を告げるか尤もあさ何とて加藤  
 も吉川もめめとすく我等と避て戦ふぬと余りめのと  
 よ子夫よ疲し井樓よ上りて見渡をへ吉川加藤の陣々よ兵糧  
 支度一馬の秣を飼たてて只今打立様よ見えし金子傳  
 兵衛味方と集め吉川加藤今日ハ休え切掛ると覺えさ味方  
 へ小勢ありとも必死の勇士よと命やと無ののと覺悟







それハ正税公廨の官物ハつゝ及々男の弓弭女ゆみのた  
ふを急として貢の絶たるハ此國人の急うどおれを  
正さんためハ秀吉の勅旨と伺ハ宣旨の使と下せし  
なれハ終ハ此國もあつゝのり國司郡司の交替  
あつゝ代とならん如何とせよとさあつゝ思  
ひもこれと居たりけり

重修真書太閤記十編卷之廿一終



